



行駛日八十二月七

# 夜 雨

高瀬勝男

九和昭七年十二月九日

蚊帳のなか、夜更しほ  
雨をさく  
嬌々嬌々ときゝ、點々と  
耳朶にはちく雨滴をとりわ  
けしみじみと味ふ  
蚊帳をつゝて半月、夏さ  
かりに近いこの頃、幾晩も  
幾晩も雨の降つて夜更けに  
重なる程、有情嬌々、今晚  
もさく  
自課する記帳に、本日室  
に坐住よ。と書き家業忙し  
くなし、己の仕事をすると  
書く  
人を迎へて幾度、明日の  
晴れを希望して、まつ程に又  
陽日來らず、雨靜かに降る  
筆をとつて務めてるこ  
と久し、夜となく蚊となき  
近頃た  
日本書といふものを専らに  
読み、此處に胸をわづて出  
るもの嘗て日本書から育  
つた、勝男の勝手な納とな  
してびをこんびをこんと產  
勝男のわからぬ繪(世  
人の評言)

(4) 友常太輝作  
髪を抱いて

高崎の旦那様、奥様、大  
罪人の山田健吾が死に臨み  
まして一切の事實を申し述べ  
てお詫を致します  
お嬢主様、何を隠しませ  
う、私は昨年の暮より御令  
嬢の花子さんと不調した事  
より懇意となり、人目を忍節を  
遠い身分の懸念、級の差別  
へ火を放いたのであります  
いたしまして、娘が不調した事  
約束はしましたが、餘りに

蚊帳のなか、夜更しほ  
雨をさく  
嬌々嬌々ときゝ、點々と  
耳朶にはちく雨滴をとりわ  
けしみじみと味ふ  
蚊帳をつゝて半月、夏さ  
かりに近いこの頃、幾晩も  
幾晩も雨の降つて夜更けに  
重なる程、有情嬌々、今晚  
もさく  
自課する記帳に、本日室  
に坐住よ。と書き家業忙し  
くなし、己の仕事をすると  
書く  
人を迎へて幾度、明日の  
晴れを希望して、まつ程に又  
陽日來らず、雨静かに降る  
筆をとつて務めてるこ  
と久し、夜となく蚊となき  
近頃た  
日本書といふものを専らに  
読み、此處に胸をわづて出  
るもの嘗て日本書から育  
つた、勝男の勝手な納とな  
してびをこんびをこんと產  
勝男のわからぬ繪(世  
人の評言)

無歌を感じて居ない  
油も墨も幸ひに雨方、格  
指もて描く、悲境、不足は  
無歌が多くてやだ、併し  
變りない、でも、不足  
も便じ得られる修養を積ん  
は不足でなれど、ほこ紙に  
も便じ得られる修養を積ん  
正直と卒直と元氣がいい

となり詩心をうごかす迄に  
無歌が多くてやだ、併し  
變りない、でも、不足  
も便じ得られる修養を積ん  
は不足でなれど、ほこ紙に  
も便じ得られる修養を積ん  
正直と卒直と元氣がいい

格構格構、よく思入な  
街の洋賣婦は好個の書材  
となり詩心をうごかす迄に  
無歌が多くてやだ、併し  
變りない、でも、不足  
も便じ得られる修養を積ん  
は不足でなれど、ほこ紙に  
も便じ得られる修養を積ん  
正直と卒直と元氣がいい

格構格構、よく思入な  
街の洋賣婦は好個の書材  
となり詩心をうごかす迄に  
無歌が多くてやだ、併し  
變りない、でも、不足  
も便じ得られる修養を積ん  
は不足でなれど、ほこ紙に  
も便じ得られる修養を積ん  
正直と卒直と元氣がいい

格構格構、よく思入な  
街の洋賣婦は好個の書材  
となり詩心をうごかす迄に  
無歌が多くてやだ、併し  
變りない、でも、不足  
も便じ得られる修養を積ん  
は不足でなれど、ほこ紙に  
も便じ得られる修養を積ん  
正直と卒直と元氣がいい

格構格構、よく思入な  
街の洋賣婦は好個の書材  
となり詩心をうごかす迄に  
無歌が多くてやだ、併し  
變りない、でも、不足  
も便じ得られる修養を積ん  
は不足でなれど、ほこ紙に  
も便じ得られる修養を積ん  
正直と卒直と元氣がいい

格構格構、よく思入な  
街の洋賣婦は好個の書材  
となり詩心をうごかす迄に  
無歌が多くてやだ、併し  
變りない、でも、不足  
も便じ得られる修養を積ん  
は不足でなれど、ほこ紙に  
も便じ得られる修養を積ん  
正直と卒直と元氣がいい

格構格構、よく思入な  
街の洋賣婦は好個の書材  
となり詩心をうごかす迄に  
無歌が多くてやだ、併し  
變りない、でも、不足  
も便じ得られる修養を積ん  
は不足でなれど、ほこ紙に  
も便じ得られる修養を積ん  
正直と卒直と元氣がいい

格構格構、よく思入な  
街の洋賣婦は好個の書材  
となり詩心をうごかす迄に  
無歌が多くてやだ、併し  
變りない、でも、不足  
も便じ得られる修養を積ん  
は不足でなれど、ほこ紙に  
も便じ得られる修養を積ん  
正直と卒直と元氣がいい

格構格構、よく思入な  
街の洋賣婦は好個の書材  
となり詩心をうごかす迄に  
無歌が多くてやだ、併し  
變りない、でも、不足  
も便じ得られる修養を積ん  
は不足でなれど、ほこ紙に  
も便じ得られる修養を積ん  
正直と卒直と元氣がいい

勝男のモデルになつた男  
副島義一 ○西伯利亞の  
全貌、山里尚行、其他傑  
が居る、文筆のたつ男、こ  
概的論文から ○狼狽へた  
男、風呂敷の哲學を語  
たことがある

人事物約多し、人の爲と  
思はず入つて己の役とする  
道をとばして瓦石に  
精進だ、熱心と誇りと休みな  
だ、熱心と誇りと休みな

き、夜をさくして榮養とす  
に惚れて詩をつくつた  
に惚れて詩をつくつた  
が居る、文筆のたつ男、こ  
概的論文から ○狼狽へた  
男、風呂敷の哲學を語  
たことがある

お秋の足音が消えると鐵  
な「エロ」侯爵○○○○  
○○○○侯爵行狀等の柔  
之助は、  
かい方面迄満載(一部十  
行駛日八十二月七

勝男のモードになつた男  
副島義一 ○西伯利亞の  
全貌、山里尚行、其他傑  
が居る、文筆のたつ男、こ  
概的論文から ○狼狽へた  
男、風呂敷の哲學を語  
たことがある

人事物約多し、人の爲と  
思はず入つて己の役とする  
道をとばして瓦石に  
精進だ、熱心と誇りと休みな  
だ、熱心と誇りと休みな

き、夜をさくして榮養とす  
に惚れて詩をつくつた  
に惚れて詩をつくつた  
が居る、文筆のたつ男、こ  
概的論文から ○狼狽へた  
男、風呂敷の哲學を語  
たことがある

お秋の足音が消えると鐵  
な「エロ」侯爵○○○○  
○○○○侯爵行狀等の柔  
之助は、  
かい方面迄満載(一部十  
行駛日八十二月七

勝男のモードになつた男  
副島義一 ○西伯利亞の  
全貌、山里尚行、其他傑  
が居る、文筆のたつ男、こ  
概的論文から ○狼狽へた  
男、風呂敷の哲學を語  
たことがある

人事物約多し、人の爲と  
思はず入つて己の役とする  
道をとばして瓦石に  
精進だ、熱心と誇りと休みな  
だ、熱心と誇りと休みな

き、夜をさくして榮養とす  
に惚れて詩をつくつた  
に惚れて詩をつくつた  
が居る、文筆のたつ男、こ  
概的論文から ○狼狽へた  
男、風呂敷の哲學を語  
たことがある

人事物約多し、人の爲と  
思はず入つて己の役とする  
道をとばして瓦石に  
精進だ、熱心と誇りと休みな  
だ、熱心と誇りと休みな

き、夜をさくして榮養とす  
に惚れて詩をつくつた  
に惚れて詩をつくつた  
が居る、文筆のたつ男、こ  
概的論文から ○狼狽へた  
男、風呂敷の哲學を語  
たことがある

人事物約多し、人の爲と  
思はず入つて己の役とする  
道をとばして瓦石に  
精進だ、熱心と誇りと休みな  
だ、熱心と誇りと休みな

き、夜をさくして榮養とす  
に惚れて詩をつくつた  
に惚れて詩をつくつた  
が居る、文筆のたつ男、こ  
概的論文から ○狼狽へた  
男、風呂敷の哲學を語  
たことがある

人事物約多し、人の爲と  
思はず入つて己の役とする  
道をとばして瓦石に  
精進だ、熱心と誇りと休みな  
だ、熱心と誇りと休みな

き、夜をさくして榮養とす  
に惚れて詩をつくつた  
に惚れて詩をつくつた  
が居る、文筆のたつ男、こ  
概的論文から ○狼狽へた  
男、風呂敷の哲學を語  
たことがある

人事物約多し、人の爲と  
思はず入つて己の役とする  
道をとばして瓦石に  
精進だ、熱心と誇りと休みな  
だ、熱心と誇りと休みな

き、夜をさくして榮養とす  
に惚れて詩をつくつた  
に惚れて詩をつくつた  
が居る、文筆のたつ男、こ  
概的論文から ○狼狽へた  
男、風呂敷の哲學を語  
たことがある

人事物約多し、人の爲と  
思はず入つて己の役とする  
道をとばして瓦石に  
精進だ、熱心と誇りと休みな  
だ、熱心と誇りと休みな

き、夜をさくして榮養とす  
に惚れて詩をつくつた  
に惚れて詩をつくつた  
が居る、文筆のたつ男、こ  
概的論文から ○狼狽へた  
男、風呂敷の哲學を語  
たことがある

人事物約多し、人の爲と  
思はず入つて己の役とする  
道をとばして瓦石に  
精進だ、熱心と誇りと休みな  
だ、熱心と誇りと休みな

き、夜をさくして榮養とす  
に惚れて詩をつくつた  
に惚れて詩をつくつた  
が居る、文筆のたつ男、こ  
概的論文から ○狼狽へた  
男、風呂敷の哲學を語  
たことがある

人事物約多し、人の爲と  
思はず入つて己の役とする  
道をとばして瓦石に  
精進だ、熱心と誇りと休みな  
だ、熱心と誇りと休みな

き、夜をさくして榮養とす  
に惚れて詩をつくつた  
に惚れて詩をつくつた  
が居る、文筆のたつ男、こ  
概的論文から ○狼狽へた  
男、風呂敷の哲學を語  
たことがある

人事物約多し、人の爲と  
思はず入つて己の役とする  
道をとばして瓦石に  
精進だ、熱心と誇りと休みな  
だ、熱心と誇りと休みな

き、夜をさくして榮養とす  
に惚れて詩をつくつた  
に惚れて詩をつくつた  
が居る、文筆のたつ男、こ  
概的論文から ○狼狽へた  
男、風呂敷の哲學を語  
たことがある

人事物約多し、人の爲と  
思はず入つて己の役とする  
道をとばして瓦石に  
精進だ、熱心と誇りと休みな  
だ、熱心と誇りと休みな

き、夜をさくして榮養とす  
に惚れて詩をつくつた  
に惚れて詩をつくつた  
が居る、文筆のたつ男、こ  
概的論文から ○狼狽へた  
男、風呂敷の哲學を語  
たことがある

人事物約多し、人の爲と  
思はず入つて己の役とする  
道をとばして瓦石に  
精進だ、熱心と誇りと休みな  
だ、熱心と誇りと休みな

き、夜をさくして榮養とす  
に惚れて詩をつくつた  
に惚れて詩をつくつた  
が居る、文筆のたつ男、こ  
概的論文から ○狼狽へた  
男、風呂敷の哲學を語  
たことがある

人事物約多し、人の爲と  
思はず入つて己の役とする  
道をとばして瓦石に  
精進だ、熱心と誇りと休みな  
だ、熱心と誇りと休みな

き、夜をさくして榮養とす  
に惚れて詩をつくつた  
に惚れて詩をつくつた  
が居る、文筆のたつ男、こ  
概的論文から ○狼狽へた  
男、風呂敷の哲學を語  
たことがある

人事物約多し、人の爲と  
思はず入つて己の役とする  
道をとばして瓦石に  
精進だ、熱心と誇りと休みな  
だ、熱心と誇りと休みな

き、夜をさくして榮養とす  
に惚れて詩をつくつた  
に惚れて詩をつくつた  
が居る、文筆のたつ男、こ  
概的論文から ○狼狽へた  
男、風呂敷の哲學を語  
たことがある

人事物約多し、人の爲と  
思はず入つて己の役とする  
道をとばして瓦石に  
精進だ、熱心と誇りと休みな  
だ、熱心と誇りと休みな

き、夜をさくして榮養とす  
に惚れて詩をつくつた  
に惚れて詩をつくつた  
が居る、文筆のたつ男、こ  
概的論文から ○狼狽へた  
男、風呂敷の哲學を語  
たことがある

人事物約多し、人の爲と  
思はず入つて己の役とする  
道をとばして瓦石に  
精進だ、熱心と誇りと休みな  
だ、熱心と誇りと休みな

き、夜をさくして榮養とす  
に惚れて詩をつくつた  
に惚れて詩をつくつた  
が居る、文筆のたつ男、こ  
概的論文から ○狼狽へた  
男、風呂敷の哲學を語  
たことがある

人事物約多し、人の爲と  
思はず入つて己の役とする  
道をとばして瓦石に  
精進だ、熱心と誇りと休みな  
だ、熱心と誇りと休みな

き、夜をさくして榮養とす  
に惚れて詩をつくつた  
に惚れて詩をつくつた  
が居る、文筆のたつ男、こ  
概的論文から ○狼狽へた  
男、風呂敷の哲學を語  
たことがある

人事物約多し、人の爲と  
思はず入つて己の役とする  
道をとばして瓦石に  
精進だ、熱心と誇りと休みな  
だ、熱心と誇りと休みな

き、夜をさくして榮養とす  
に惚れて詩をつくつた  
に惚れて詩をつくつた  
が居る、文筆のたつ男、こ  
概的論文から ○狼狽へた  
男、風呂敷の哲學を語  
たことがある

人事物約多し、人の爲と  
思はず入つて己の役とする  
道をとばして瓦石に  
精進だ、熱心と誇りと休みな  
だ、熱心と誇りと休みな

き、夜をさくして榮養とす  
に惚れて詩をつくつた  
に惚れて詩をつくつた  
が居る、文筆のたつ男、こ  
概的論文から ○狼狽へた  
男、風呂敷の哲學を語  
たことがある

人事物約多し、人の爲と  
思はず入つて己の役とする  
道をとばして瓦石に  
精進だ、熱心と誇りと休みな  
だ、熱心と誇りと休みな

き、夜をさくして榮養とす  
に惚れて詩をつくつた  
に惚れて詩をつくつた  
が居る、文筆のたつ男、こ  
概的論文から ○狼狽へた  
男、風呂敷の哲學を語  
たことがある

人事物約多し、人の爲と  
思はず入つて己の役とする  
道をとばして瓦石に  
精進だ、熱心と誇りと休みな  
だ、熱心と誇りと休みな

き、夜をさくして榮養とす  
に惚れて詩をつくつた  
に惚れて詩をつくつた  
が居る、文筆のたつ男、こ  
概的論文から ○狼狽へた  
男、風呂敷の哲學を語  
たことがある

人事物約多し、人の爲と  
思はず入つて己の役とする  
道をとばして瓦石に  
精進だ、熱心と誇りと休みな  
だ、熱心と誇りと休みな

き、夜をさくして榮養とす  
に惚れて詩をつくつた  
に惚れて詩をつくつた  
が居る、文筆のたつ男、こ  
概的論文から ○狼狽へた  
男、風呂敷の哲學を語  
たことがある

人事物約多し、人の爲と  
思はず入つて己の役とする  
道をとばして瓦石に  
精進だ

